令和５年度　学校経営計画・自己評価書

足立区立西伊興小学校
校長　金田　耕一

１　学校教育目標

〇かんがえる子　　〇やさしい子　　〇げんきな子

２　めざす学校像、児童・生徒像、教師像

〇学校像	〇児童が通ってよかった、保護者が通わせてよかった、教職員が勤めてよかった、地域が誇りに思える学校 〇安全安心で、未来の人材を育てる学校　　〇よく学び、友達に優しく、体力を高めることのできる児童を育てる学校
〇児童・生徒像	〇よく考え相手の気持ちを聞きながら学び合える児童　　〇あいさつがしっかりでき、思いやりをもって礼儀正しくできる児童 〇積極的に運動に取り組み、健康な体をつくろうとする児童
〇教師像	〇児童が主体的に取り組む授業を実現させるために常に学び続ける教師 〇児童に深い愛情をもちながら授業で勝負できる教師　　〇メリハリをつけた指導で学校に来ることを楽しみにさせる教師

３　学校の現状及び前年度の成果と課題

（１）学校の現状

〇通常学級１８学級、特別支援学級４学級、全２２学級、児童数６０３名。（令和５年１月現在）
〇令和４年度に創立５０周年を迎え、１年間計画的に記念事業を展開し、記念式典も実施することができた。
〇年々児童数が増加しており、令和６年度は教室が不足になる可能性が高い。教育委員会と強く連携していく。
〇意見をしっかり出し合い、決定した事項についてはチーム西伊興として一体になって取り組んでいる。
〇児童は素直な気持ちをもって学習に取り組んでいる。家庭・地域・学校が連携しながら学校教育を推進できている。
〇学習活動の充実と新型コロナウイルス感染予防を両立させながら教育活動を推進できた。

（２）前年度の成果と課題

☆前年度の成果

〇区学力調査の目標値に対する学区平均通過率　⇒　令和３年度８８．１％、令和４年度８８．０％。平均正答率は区平均を１４．８％上回っている。
〇いじめ早期解決１００％　⇒　いじめ認知件数７３２件は全て解決済み＋いじめを原因とする不登校は０
〇リモート学習や別室登校、チャレンジ学級等の実態に合った登校　⇒　出席が全くなしの児童は０＋教室に復帰できた児童３名
〇ノーチャイムの継続　⇒　時計を見ながら自分で考えて行動できることの増加
〇全校児童が校庭に会しての運動会、ブロックの６年生が集合しての連合運動会の実施　⇒　学び合うことの楽しさを体験
〇有事や欠席の場合のリモート授業　⇒　国語・算数の学習を中心に学習の保障＋感染状況に左右されない授業参観
〇ＩＣＴによる家庭と学校の連携　⇒　１年生以外はほぼタブレットを通じての情報共有を実現

★前年度の課題
〇主体的で対話的な学び合いを追求し続ける　⇒　算数科では課題を工夫する事例が増えた。令和５年度からは体育科で校内研究を推進。
⇒　意見発表や学び合いの時間がまだ少ない。児童が主役になる時間を意図的に増やす。
〇いじめはいつでもどこでも起こりうるという認識を忘れず、令和５年度も早期の段階で１００％解決。
⇒　家庭との連携が必要だと判断できる場合は、迅速に協力を依頼していく。
〇教室復帰という成果を得ることもできたが、不登校傾向の強い児童が０になることは現実的にはない。これからも、特別支援教室・ＳＣ・ＳＳＷ・ＳＡ・特別支援学級・学習支援員・ＳＳＳ等との連携を密にし、担任一人が抱え込まないシステムを継続する。
〇コロナ禍の弊害の一つとして運動不足が挙げられる。確実に体力も免疫力も低下している。体育科の学習や休み時間の活用で体力向上のための取り組みを増やしていく。
〇有事の際のリモート授業は定着したが、授業参観や保護者会における効果的な方法を探っていく。対面に勝る学び合いはないことを改めて認識しながら家庭・地域・学校の連携を深めていく。
〇５０周年記念事業とリンクさせながらＥＳＤ－ＳＤＧｓへの取り組みを実施できた。今後は取捨選択を継続させながら各学年の実態に応じた取り組みを継続させていく。自分の意見を発表することに課題を感じている児童が多いため、実生活とのつながりが強い場面において発表経験を増やす。

４　重点的な取組事項

	内　　容	実施期間（年度）　R:令和				
		R3	R4	R5	R6	R7
1	学力向上アクションプラン	○	○	○	○	○
2	協働的な学び合いの推進			○		
3	体力向上と病気の予防	○	○	○		
4						

５　令和５年度の重点目標

重点的な取組事項－１	学力向上アクションプラン

Ａ　今年度の成果目標	達成基準（目標通過率）	実施結果（通過率結果）	コメント・課題	達成度◎○△●
主体的・対話的で深く学び合う授業の実現	目標値通過率９０％	目標値通過率90．2％	3年連続で目標を達成。	◎

Ｂ　目標実現に向けた取組み

新・継	アクションプラン	対象学年実施教科	頻度・実施時期	具体的な取り組み内容（誰が、何を、どのように）	達成確認方法	達成目標（＝数値）（いつ・何を・どの程度）	実施結果	コメント・課題	達成度◎○△●

1 継続	授業改善	全児童 体育科及び全教科	年間	・毎月、体育科の研究授業を各学年及び特別支援学級で実施。学び合いの場面を必須とし、他教科への応用を図っていく。 ・学校生活以外の場面でも学ぶ姿勢を継続させるため、家庭や地域でも継続できる学習活動を共有し、他教科においても学習の日常化につなげていく。	・校内研究で取り組んでいる学び合いの場面を他教科でも生かしているか、授業観察や教科指導専門員の指導で確認。 ・土曜授業で体育科学習公開及び保護者参加も推進し、家庭や地域と運動する場面を共有。	・ほとんどの授業において話し合い場面が実施されている。 前期７０％ 後期１００％ ・全学年が実施できるように年間計画に組み入れる。保護者アンケートを行い、家庭でも取り組んだ運動を明確にし周知。	・校内研究や体育科の授業のみならず、話し合って学び合っている場面が通常になってきている。次年度も児童が主体的に取り組む授業を継続していく。 ・雨天による中止以外は体育科学習を公開できた。運動会前の学習に対しては特に保護者の反響が大きかった。地域の方々にもたくさんの感想を寄せていただいている。	・校内研究を体育科に決めたことにより教師も児童も主体的なおかつ意欲的に取り組んでいることが一番の成果である。次年度は学び合いの質をさらに高めていきたい。 ・土曜授業の公開は保護者や地域との連携を強化することにつながった。次年度も継続させながら、保護者や地域の方々が授業に参加できる方法も検討していく。	◎
2 継続	小中連携における共通実践	全児童 全教科	年間 ７回	・意識調査から連携４校において「自分の考えを発表したり伝えたりすること」に大きな課題がある。各分科会において「発表や話し合いの場面」を確保していくことを共通実践させる。 ・各分科会で管理職が指導助言する項目も共通させて行う。	・各分科会の授業及び協議会において話し合いの場面に関する協議を必須。 ・各分科会の指導助言においても必ず触れる。	・連携４校の児童・生徒に同じ項目のアンケートを１月に実施。８０％以上を目標値とする。 ・話し合いが活発になるような発問ができているかという理解を深める。	・本校のみのアンケートだが、自分の考えを伝えられた児童は　　％。ペアやグループでの話し合いが日常になっている。 ・道徳部会では、話し合いの中でどんなことについて考えてほしいか、またどういう発問すれば考えられるかを年間通して協議した。	・連携４校の成果と課題は令和６年度の区学力調査で分析。自分の考えを発表できる力を身に付けさせる具体的な方法を実践していく。 ・各分科会の協議で有効だったと考えられる手法を共通理解し、それぞれの学校で実践。次年度はその成果と課題をもとに協議を深めていく。	○

3 継続	ＩＣＴ機器の効果的活用	全児童 全教科	年間	・基礎基本の定着を図るためにＡＩドリル（特に算数）を活用する。 ・問題に対する見通しや友達の意見を視覚的に捉えられるように工夫する。	・２年生以上の家庭学習はＡＩドリルを基本とする。 ・授業観察や教科指導専門員の指導で確認。	・各教科８割達成。算数は９割以上。 ・ＩＣＴ機器を効果的に活用して場面を取り上げ、全体で共有していく。	・１年生もＩＣＴ機器を活用できた。ＡＩドリルの活用は区の目標を達成。 ・アナログ的方法も認めながら、より効果的な手法にチャレンジさせていく。	・ＡＩドリルはもう当たり前のこととし今後は授業の中での有効活用を目標にしていく。 ・失敗して当たり前という感覚をもちながら児童とともにＩＣＴ機器を活用していく。	○
4 継続	ＥＳＤ－ＳＤＧｓへの取り組み	全児童 各教科及び領域	年間	・生活、総合、社会、理科学級活動等を通して、児童が主体的に取り組めるように計画する。 ・新規に行った活動に関しては必ず評価をし、次年度継続していくべきか検討。	・週案簿や学年主任との面談から実施状況を把握。 ・新規に行った活動に関しては継続するかどうかを決定。	・児童が主体的に取り組んでいるか確認。さらに話し合い活動が活発に行われているか。 ・新規の活動については２月まで決定。	・全ての活動において児童が主体的に取り組んでいた。話し合い活動の活性化が今後の課題。 ・新規の活動も含め土曜授業で学習活動を公開。家庭や地域との共通理解を深めることができた。	・年間通して無理なくＥＳＤ―ＳＤＧｓへ取り組むことができた。今後も内容の充実を図っていく。 ・今後も公開授業を継続し、保護者や地域の方々が一緒に参加できる方法も模索していく。	○
5 継続	放課後補充	単元テスト満点児童以外 国語科 算数科	随時放課後 ３０分程度	・単元テストの間違いをしっかりメタ認知させ、基礎基本のつまずきを減らす。 ・漢字は効果的に反復練習し、練習で書けるようになることを実感させる。	・毎回しっかりテスト直しをしているか学年主任に確認。 ・漢字テストの点数状況を確認。	・単元テスト実施後１週間以内を目途にする。 ・漢字テストは８０点をとるまで再チャレンジさせる。	・単元テスト実施後早めにつまずきを確認し補充。特に算数は必ず実施。 ・学年やクラスによって漢字再テストの回数は異なるが、再チャレンジに取り組んでいた。	・放課後補充と命名するほど大規模に行っていない。各担任の努力によるところが大きいため、次年度はアクションプランから外す。 ・漢字再テストの取り組みは継続。	○

6 継続	サマースクール	目標値未通過児童 国語科 算数科	夏季休業中の１０日間	・全学級において７月までの学習内容を定着させる。 ・全学級において希望者がいたら発展的学習にも取り組ませる。	・単元テストの結果も分析し、総合的に補充児童を決定。 ・発展的学習の希望者を募る。	・参加児童は全員、区学力調査の目標値を通過。 ・発展的学習は人数と学習内容によって目標を設定。	・担任と保護者の思いとリンクさせながらサマースクールを実施。 ・発展的学習を実施する余力がない。今後もつまずき解消に重点をおいて実施。	・人数が限られているため、全体で学力定着に寄与している方策とはいえない。次年度のアクションプランから外す。補充の必要な児童を支援するための仕組みだけを継続させる。	○
7 継続	そだち指導と校長室補充	正答率５０％未満で特別支援を要する児童	適宜	・そだち指導や特別支援教室とのすみわけを行い、個別支援が十分に行われていない児童を対象とする。 ・教室で集中できない実態がある時は効果的に取り出し指導も実施。	・校長室補充を行った児童も最終的に自分の教室で取り組ませ、自分の学級で学習することを定着させる。	・対象児童を決定し、前期は校長室補充を柱にする。後期は、自分の学級で学習に取り組むことを原則にする。	・校長室補充は行わなかった。気持ちをリセットしたりカウンセリングを行ったりすることで児童をサポート。学習面以外での支援が１００％。	・そだち指導が担任との連携で滞りなく実施されている。学習のつまずき解消に大きく寄与している。そだち指導を通常の取り組みと捉え、アクションプランから外す。	◎
8 新規	学校図書館の活用	全児童 全教科	年間	・図書支援員の勤務増に伴い、図書担当教員を核にして、読書量増加を目指す。 ・読書量増加と読書の指導法を工夫しながら、語彙力や調べる力を伸ばす。	・週一度の図書の時間に加えて、休み時間も図書室を活用する。 ・図書支援員や図書ボランティアと連携しながら、読み聞かせやパネルシアター等の読書指導法のスキルを高める。	・２年前から確実に一人当たりの読書量が増加しているため、各学年の目標達成９０％以上。 ・調べる学習コンクールにおいて３学年は８０％以上、４～６学年は９０％以上。	・児童一人当たりの貸出冊数が令和３年度から１６．５→１９．４→２４．６と右肩上がりで増加。低学年へのオリエンテーションやクイックファレンス、本の福袋等が企画され、読書への意欲が高まっている。 ・図書支援員や図書ボランティアとの連携が深まり、読み聞かせは定着した。調べる学習への参加も定着している。	・読書活動は量よりも質への転換を図る時が来ている。ただ、読書意欲を下げる必要はないため、図書の時間をどのように活用していくかを協議していく。一挙に変革できる内容ではないため、新たな取り組みに少しずつチャレンジしていく。 ・現在の取り組みを継続させる。異年齢集団のスマイル班読み聞かせの充実を図るための連携。	○

重点的な取組事項－２	協働的な学び合いの推進

Ａ　今年度の成果目標	達成基準	実施結果	コメント・課題	達成度
人権教育・道徳教育・特別支援教育の充実	年度末アンケート 「相手の話をきちんと聞いた」 「相手の気持ちを考えて行動できた」 ９０％以上	「相手の話をきちんと聞いた」 ９１．９％ 「相手の気持ちを考えて行動できた」 ８６．７％	相手の話をきちんと聞くことができているが相手を考えた行動を今後もっと増やしていきたい。	◎

Ｂ 目標実現に向けた取組み

項目	達成基準	具体的な方策	実施結果	コメント・課題	達成度
全ての授業において対話的な深い学び合いを目指す	各授業の検討場面において「自分の意見を発表し友達の意見をよく聞いた」９０％以上	・日々の授業観察や研究授業 ・管理職や教科指導専門員による指導及び助言。 ・直接助言できなった教員に対しては週案簿において具体的なアドバイス。	・ペアやグループでの話し合いはほぼ行われている。 ・間違いやポイントのずれた意見も活用しながら話し合い活動を深めていくことを指導及び助言。 ・週案簿でも１週間の振り返りの内容に応じてアドバイスを継続。	・教師の話す時間が減り、児童の言動の時間が増えてきた。 ・クラス全員の意見を活用する場面が増えてきた。今後も全員の意見を生かすことを目標にしていく。	○
道徳教育の充実	毎時間の授業における振り返りで「よく考えた」９０％以上	・実生活に即した教材を工夫し、ノートやワークシートへの記入を確認。 ・道徳授業地区公開講座への参加者を増やし、学校・家庭・地域の連携を深める。	・実生活だけでなく教師の実体験も活用しながら道徳授業を構成。ほとんどの児童が「よく考えた」という評価。 ・道徳授業地区公開講座の日、全体を２部に分けて授業参観実施。	・教師が思いをもって道徳授業を行っている。これからも児童一人一人に考えさせる。 ・今後は道徳的実践力を高めていくための協議を行っていく。	○
いじめの早期発見、早期対応、早期解決	年間２００件ほどのいじめの芽に早期に対応し、早期解決１００％	・学校生活における児童の様子を教職員全員で共有。 ・いじめ調査を活用し、課題があれば、すぐに対応。 ・ＳＮＳ上におけるいじめに関しては、家庭・地域と連携。学校からは常に発信し続ける。	・生活指導夕会を核にして児童に関する情報を教職員で共有。 ・保護者からの相談をきっかけに組織で対応したのが２件。うち１件は教育相談課や教育指導課とも連携して対応中。 ・ＳＮＳ上でのトラブルは起きていない。今後も家庭・地域と連携しながら早期対応をしていく。	・担任もしくは学年でほとんどの案件を解決している。 ・チーム学校対応に決まった案件は管理職も関わりながら解決に向けて一歩一歩進んでいく。 ・ＳＮＳルールを適宜確認していく。	◎

特別支援教育の充実	年度末アンケート 「困っている人を助けることができた」 ９０％以上	・教職員及び児童全員が合理的配慮を理解しながら行動。 ・特別支援学級及び教室と通常学級との交流を推進し、どんな状況でも垣根なく学び合える風土を作る。	・全クラスの合理的配慮の必要な児童を共通理解し、担任でなくても適切な声がけができている。 ・特別支援学級の２年生が通常学級クラスで生活科の学習活動を行った。校外学習も今まで通り各学年一緒に学習活動を行っている。	・スクールアシスンタントの支援を借りながら、できる限りの合理的配慮を実践していく。 ・日常の学習においてさらに通常学級との交流学習を実現させていく。	◎

重点的な取組事項－３	体力向上と病気の予防			
Ａ　今年度の成果目標	**達成基準**	**実施結果**	**コメント・課題**	**達成度**
体力向上の取り組みを通し、免疫力を高めながら、スポーツを楽しむための体幹を鍛える	１つの指標として「５０ｍ走」の数値をアップさせる。	・４つの学年において男女とも区平均を上回る ・「体力を高めたり病気を予防したりした」　８６．１％	・立ち幅跳びや反復横跳び等の数値がやや低い。ほかの種目も区平均に近づけるよう体力向上を図っていく。	○

Ｂ 目標実現に向けた取組み

項目	達成基準	具体的な方策	実施結果	コメント・課題	達成度
体力調査結果を区平均にする	○５０ｍ走区平均	・５月の体力調査結果を集約し、各学年の５０ｍ走平均値を把握する。１０月の運動会に向けた計測値と比較し、伸びと区平均との差を明確にする。	・インフルエンザ感染流行のため、５月と１０月の比較を実施できなかった。次年度のスポーツテスト結果を分析し成果と課題を明確にする。５０ｍ走に加えて、２０ｍシャトルランとソフトボール投げは区平均値に近い。	・区平均に達するのが早そうな種目とやや時間がかかりそうな種目が明確になっている。５０ｍ走、２０ｍシャトルラン、ソフトボール投げは区平均を目指す。	○

体育授業の充実	○３０分以上の運動量の確保。 ○運動の楽しさや喜びの体験。 ○運動の日常化。	・体つくり運動を通して、身体を動かす心地よさを味わわせる。 ・器械、走や跳、水泳、表現の運動の楽しさや喜びに触れさせる。 ・休み時間や放課後の遊びにもつながる教材の工夫。 ・土曜授業において体育学習を計画的に公開。可能ならば保護者も活動に参加させる。	・準備運動から笑顔で楽しく夢中になって活動している。特に１年生は顕著な成果を見せている。 ・学びの場、グループ編成、教育過程、ルール作り等に工夫があり児童が意欲的に体育学習に取り組んでいる。 ・校庭では鉄棒や上り棒、ドッジボール等が盛んに行われている。 ・保護者の参加は実現できなかったが、保護者は積極的に体育学習を参観していた。運動会前は特に盛況だった。	・校内研究で培った具体的な方法を積極的に取り入れている。今後もよいものをどんどん真似していく。 ・校内研究の深まりとともに体育科授業のポイントをつかみ始めている。 ・校庭での遊びをに日常生活にもつなげたい。 ・次年度は保護者や地域の方々を参画させたい。	◎
縄跳び、インターバル走の全校実施	○長縄～区の目標達成 ○短縄～個人のめあて達成８０％以上。 ○２０ｍ走シャトルラン～高学年において区平均の達成	・秋から冬にかけて取り組み重点期間を設定する。 ・学校での取り組みを家庭や地域へ周知し、学校生活以外の時間でも体力向上への意識を啓発。	・長縄や短縄には計画的に取り組めた。区の目標や個人のめあてをおおよそ達成。２０ｍシャトルランの再テストを実施できなかったため、次年度のスポーツテスト結果を分析する。 ・学校での取り組みはブログや公式ＬＩＮＥを活用しながら周知。家庭生活や地域ではスポーツクラブに所属している運動量は多い。	・年度内にスポーツ再テストを実施することはスケジュール的に困難である。無理せず、次年度の調査結果を分析していく。 ・体力や免疫力を高めていく必要性だけは常に共有していく。そして放課後等の運動量増加につなげたい。	○
オリパラ教育の継続	○スポーツ志向を高める	・ボランティアマインドや障がい者理解も同時に深めるため、オリパラ経験者や専門家を招聘した体育授業を実施。 ・国際理解を深めるための教育活動も継続。	・５学年がシットインバレーボールや野球教室を体験。４学年は盲導犬に出会いながら実際の生活を学んだ。 ・英語科学習において香港やベトナムとオンラインで交流。ネイティブな英語を話す経験ができた。	・学年は制限されるが経験値を高めることができている。次年度は時間的に余裕があれば３学年にも体験させたい。 ・英語に限らず、総合的な学習等において国際理解を深めるための取り組みを６学年中心に行っている。	◎

６　まとめ

（１）今年度の成果と次年度に向けた課題及び解決の方向性

〇定着した基礎学力をもとに主体的で対話的な深い学び合いを積み重ねていく。結果として今後の世界で絶対に必要な「思考力・表現力・判断力」を伸ばしていく。

〇３０人以上在籍する学級において１００％目指すことは困難であるが、「個別最適な学び」を愚直に目指していく。担任一人の力で不可能であるという判断をした場合は、他の教職員や関係諸機関と連携し、対象児童のよりより学びの環境を構築していく。

〇そだち学習、放課後補充、サマースクール等は、定着していることとの日常的に行われていることをふまえ、次年度の学力向上アクションプランから外す。授業改善・小中連携の実質的進化・ＩＣＴ機器の効果的活用・ＥＳＤ－ＳＤＧｓへの取り組み・学校図書館の活用・協働的な学び合いに重点をおく。

〇協働的な学び合いは「思考力・表現力・判断力」の育成に直結する。今年度、異年齢集団による活動が復活した意義は計り知れないほど大きい。スマイル班による読み聞かせや全校集会等の活動を拡充していく。特別支援や合理的配慮の必要な児童の活躍の場を増やし、自己有用感を高める。

〇いじめの早期発見・早期対応・早期発見は継続して１００％行う。学校では把握しきれないＳＮＳに関するトラブルに関しては家庭と情報共有しながら対応策を考えていく。必要に応じて関係諸機関と連係する。

〇特別支援教育の理解を進めているところだが、まだ不十分である。特別支援学級や特別支援教室だけでなく学びの多様化学校にも触れながら、既存の学校概念を変革したい。登校する児童との学び合いを大切にしながら個に応じた学び方を家庭・地域・学校で共有し、一人一人の学びの保証を実現させていく。

〇３年間で学んだ感染症予防の知識を常に活用し、体力と免疫力向上も目指す。校内研究を体育科に指定し１年間授業改善に取り組めたことは大きな成果である。次年度もめあてをもって児童全員が楽しく運動する学習を継続させる。体育授業公開も継続し、家庭・地域との連係を深めていく。

（２）保護者や地域へのメッセージ

　コロナが５類へ移行し授業や運動会をフリーで参観してもらうことができました。その中でも秩序を保ちながら学校運営できていることをありがたく思います。今後も全てをフリーにするのではなく児童ファーストの学校教育を推進していくためのプランを提案していきます。また、次年度から全学年学級編成替えを実施し、多様な学びを実現させ、成長するチャンスを増やしていきます。今後も働き方改革を推進し、毎日元気な教職員が児童一人一人に寄り添いながら教育活動を行ってまいります。令和型日本教育は「個別最適な学び合い」と「協働的な学び合い」を目指しています。しかしもしかしたら既存の学校では学びづらいこともあります。これからは多様な学び合いがスタンダードですから、困ったとき悩んだときは遠慮なく学校や関係諸機関に相談してください。

（３）その他（学校教育活動全般について）

　世界の情勢や日本で起きている事件を見ていると不安になることはあるが、「学校は未来の人材を育てる」重要なミッションを果たしているという強い認識をもち、児童を成長させるために最善を尽くしていく。児童も教職員も「体調が第一である」という当たり前のことを意識し、心身ともに健康な状態で学校教育を推進していく。